

7 奄美漁業のめざす方向

I 奄美カツオアイランド

〈背景〉 奄美は非回遊カツオ（根カツオ）が生息する唯一の島。それでカツオの周年漁獲が可能となっている。だが、漁獲量は往年とは比較できないほど低下している。資源維持策に着手しなかったことが原因。そこでカツオの人工孵化・稚魚放流を実施し、世界から注目される「カツオ アイランド」を実現すべきである。

〈技術〉 カツオは、養殖不可能と見られていたが、マグロの完全養殖の成功でカツオの養殖も可能と見られている。現に、高知大学と同県・大月町の山崎技研が2020年夏にカツオ養殖の研究に着手した。水産庁も協力し、親カツオ30尾を提供している。現在、大型水槽での親カツオの飼育に成功、今後、授卵・孵化・稚魚飼育・トロカツオの生産を目指す。

クロマグロ完全養殖の飼育技術の応用で見通しは明るいと関係者は見ている。高知のチームは2023年までに目標を達成する計画である。

奄美で目指すのは、トロカツオの生産でなく、稚魚放流・根カツオの資源安定であり、高知プロジェクトよりハードルは低く、水産庁の理解協力も得やすい。

カツオ稚魚放流事業には、稚魚の定着、成長に必要な沿岸環境の整備も欠かせない。ペットボトルなど沈着ごみの除去、奄美の海固有の藻場造りを進めれば、プランクトンが湧き、カツオの主要エサであるキビナゴの資源も増える。

II リュウキュウアユの養殖

〈背景〉 現在我が国で商業流通している鮎の90%以上は養殖鮎である。昭和4年に鮎の池中養殖に成功して以来、ウナギと共に我が国で最も安定している内水面養殖で経営体も増え続けている。鮎は食材として和・洋・中どんな料理にも使えるため 輸出も増えつつある。河川の真珠と言われ、奄美だけに生息するリュウキュウアユの資源を増殖することは奄美にとっては世界的な責任と言える。食材としてではなく、本場の琉球列島に里帰りさせる目的でリュウキュウアユの養殖に取り組む。将来、『川のパール』を食する夢を乗せて。

〈技術〉 海産稚魚を捕獲し陸上池で飼育する技術は古くから確立されている。河川水をポンプで送って川の流れを作って育てる鮎養殖は奄美が最適地である。

(梅 崎 義 人)